

寺子節用福寿海の編纂をめぐる

米谷隆史

一 はじめに

本稿は、元禄六（一六九三）年刊行の寺子節用福寿海の編纂資料を確認することで、節用集と、辞書の中でも往来物に近いとされる「字尽」との交渉の一例を示し、その意義について検討を加えることを目的とする。

書名に「子供」「寺子」等を含む江戸中期以降の辞書については、既に関場（一九九三）にまとまった言及がある。

関場氏が言及する辞書は、氏が述べる通り、概して同時代に通行の節用集よりも所収語が少なく、行草体一行で語を掲出するものがほとんどである。そして、外題を「改正寺子供節用集」としながらも、内題を「日用重宝万文字尽」とする一本のように、イロハ分類ではなく意義分類の語彙集であるもの、また、寛延四（一七五二）年刊の寺子節用錦袋鑑のように、イロハ分類は採るもののその下に意義分類は置いていないものなど、通常は「字尽」と称される辞書に

近いことが特徴である。こうした辞書群の位置づけについては、節用集と子どもとの関わりについて具体例を以て検討を加えた佐藤（二〇〇二）も精査の必要を指摘している。書名に初学者向きの「節用」集であることを謳う辞書としては早い例に属する寺子節用福寿海の編纂が、辞書史の流れの中でどのように位置づけられるかの検討を試みる所以である。

一 書簡・文書用語を増補する節用集

寺子節用福寿海についての検討に入る前に、本書が刊行された元禄期に節用集諸本が新たに備えるようになった特徴を確認しておこう。

元禄期に新たに刊行されるようになった節用集の一特徴として書簡や文書に使用する語を増補していることが挙げられる。元禄六年刊の広益字尽重宝記綱目や、元禄九年刊

の大広益節用集等が早い時期のものであるが、特に後者の系統の節用集は数多く刊行され、以降の節用集の主流となっていく。元禄九年刊の大広益節用集に近い辞書本文を有する節用集として米谷（一九九七）（以下、先稿と称する）では、次の三類七本が確認できることを述べた。①に該当する本については後述する。なお、左記の分類符号は先稿と同一ではない。また、「」内に刊年を記したのは刊記の欠落のため、年代記等の記載から刊年の上限を推定したものである。

X類

②大広益節用集 元禄九年 上田市立図書館花月文庫

③万宝節用集 元禄一四年 広島大学

Y類

④頭書増字節用集大成 元禄一〇年 国会図書館亀田文庫

元禄一六年 刈谷市立図書館

⑤新大成増字万宝節用集（元禄一一年）米谷

Z類

⑥頭書増補大節用集（元禄一〇年）米谷

⑦頭書増補大成節用集 元禄一一年 国会図書館亀田文庫

元禄一二年 国会図書館亀田文庫

元禄一三年 米谷

⑧大節用集大家蔵

〔元禄一六年〕米谷

X・Zの三類間の差違はそれほど大きくない。先稿で調査対象としたイ部、ア部とも、九割以上の所収語を共有しており、語順も大部分が一致している。ただし、各類とも左に示すような辞書本文の不整合が見られた。②④⑥を各類の代表として示す（以下、引用の際には特記しない限り注文は省略している）。最初に掲出するのが不整合が見られる本、次の二本が整序と見られる本の記載である。

② 石窟あまのいはや 降あまくたる 野あまの 秋津嶋あきつしま 天地あめつち 下あめがした 足曳山あしびきのやま

④ 天地あめつち 下あめがした 石窟あまのいはや 降あまくたる 野あまの 滄溟あうみ 秋津嶋あきつしま 足曳山あしびきのやま

⑥ 天地あめつち 下あめがした 石窟あまのいはや 降あまくたる 野あまの 秋津嶋あきつしま 足曳山あしびきのやま

④ 聳あたまるゆき 雪あまのゆき 丸雪あまのゆき（間に二七語）あられ 霰あられ

⑥ 聳あたまるゆき 雪あまのゆき 霰あられ 丸雪あまのゆき

⑥ 哀あはれなるかな 哉あはれなるかな 有増あま（間に一六語）あ 荒あ 啖あはれ 程あはれ

② 哀あはれなるかな 哉あはれなるかな（間に二四語）あ 荒あ 猿あらい 有増あま 愛あ 敷あはれ

④ 哀あはれなるかな 哉あはれなるかな（間に八語）あ 荒あ 猿あらい 有増あま 愛あ 敷あはれ

このことから、先稿では、系統上、この三類に先立つ一本を想定する必要があるかもしれないとも考えたわけである。

その後、元禄八年の刊記を有する節用集を見出すことができた。この本は三類に先立つ一本の条件にかなり合致するようである。以下、この本を①として検討を進めることとする。

①内題無 元禄八年 米谷 神戸女子大学

①は大本一冊。拙蔵本は、冒頭部を逸しており、巻末も一部に破れがあるが、刊記「元禄八年乙亥林鐘吉日／大坂瓦町」の記載までを残す。この左の行に書肆名があったと見られるが、現存部分からはそれを読み取ることはできない。毎半丁八行。この節用集は、通常の節用集では辞書本文が始まる丁の一行目に存する内題がなく、そのまま辞書本文が始まる点が極めて特徴的である。拙蔵本はやや虫損があるため、刊記部分を欠くものの、拙蔵本と同内容で保存状態も良い神戸女子大学森修文庫蔵の一本を併せて参照しつつ、①と右の三類との関係について先稿の補訂を行う。

まず右に挙げた辞書本文の不整合の見られる三例についてみると、①は、一例目は⑥、二例目は②⑥、三例目は④に一致しており、いずれも不整合は見られない。

①と右の三類の節用集はイ部に「言」乃至は「云」を頭字とする語群を言語門後半部に有する。元禄期の節用集においては、頭字を同じくする語群を掲出する場合、二語目

以降の頭字部分は「―」で代用することが多い。しかし、その掲出が二行以上にわたる場合は、次行以降の行頭において再び頭字を示すことがある。①のイ部で「言」「云」を頭字に置く五九語のうち、頭字を示しているのは次の七語である。各語の位置は、丁数（漢数字）、表・裏、行数（漢数字）、行頭から数えた語順（算用数字）で示している。なお、丁数は柱刻の数字ではなく、辞書本文初丁からの起算である。

言誘いひまほく（五裏六・二） 云捨いひすて（五裏七・一） 云釈いひはやく（五裏八・一）

云留いひとまる（六表一・一） 云募いひとまる（六表二・一） 云違いひちがへ（六表二・一〇）

云説いひとく（六表三・一）

冒頭の「言誘」はともかくとして、残りの六語のうち、「云違」を除く五語はいずれも行頭に位置する語である。「云説」がこの語群の最後の（五九番目の）語であることから、①では、五丁裏の七行目から六丁表の三行目までの五行の全ての行頭において頭字「云」を示していることになる。こうした行頭の頭字表示を比較することで、①と②④⑥との関係を検討してみることしよう。なお、②においては、①で頭字を「―」で代用している語にも「云」を示す例が別に三語見られる。したがって、この三語を加えた合計一〇語について①②④⑥を対照することとした。一〇語には①での出現順にA～Jの符号（大文字は①で「言」

「云」を示す語、小文字は①で「―」で代用している語である。①を付し、各々の節用集での掲載順に並べて示したのが次の表である。

| ① | ② | ④ | ⑥ |
|---------------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|
| A 言嘖 <small>(五裏六)</small> | A 言嘖 <small>(八表五)</small> | A 言嘖 <small>(六表三)</small> | A 言嘖 <small>(六表四)</small> |
| b 一置 <small>(五裏六)</small> | C 云捨 <small>(八表六)</small> | b 一置 <small>(六表三)</small> | b 一置 <small>(六表五)</small> |
| C 云捨 <small>(五裏七)</small> | E 云積 <small>(八表七)</small> | C 云捨 <small>(六表四)</small> | C 云捨 <small>(六表五)</small> |
| d 一隔 <small>(五裏七)</small> | b 云置 <small>(八表八)</small> | d 一隔 <small>(六表五)</small> | d 一隔 <small>(六表六)</small> |
| E 云積 <small>(五裏八)</small> | F 云留 <small>(八裏一)</small> | E 云積 <small>(六表五)</small> | E 云積 <small>(六表六)</small> |
| F 云留 <small>(六表一)</small> | d 云隔 <small>(八裏二)</small> | F 云留 <small>(六表六)</small> | F 云留 <small>(六表七)</small> |
| G 云募 <small>(六表二)</small> | G 云募 <small>(八裏二)</small> | G 一募 <small>(六表七)</small> | G 云募 <small>(六裏一)</small> |
| h 一遣 <small>(六表二)</small> | I 云進 <small>(八裏三)</small> | h 一遣 <small>(六表八)</small> | h 一遣 <small>(六裏一)</small> |
| I 云進 <small>(六表二)</small> | h 云遣 <small>(八裏四)</small> | I 云進 <small>(六表八)</small> | I 云進 <small>(六裏二)</small> |
| J 云説 <small>(六表三)</small> | J 云説 <small>(八裏四)</small> | J 云説 <small>(六表八)</small> | J 云説 <small>(六裏二)</small> |

②は、①と同様に全ての行頭において「云」を示すように配慮をしたものといえる。行頭でなくなったJの頭字を「―」にしていることもその反映であろう。②は附録の頭書を二段にする節用集で、辞書本文の行の高さが他の節用集に比して低い。そのため、この五九語の語群を収めるのに八行を要することになり、行頭に位置する語が三語増えることになった。①で「―」としていたb・d・hの三語でも「云」を示すのはそのためである。興味深いのは、②のb・d・hにおける「云」字が、他の行頭のA・C・E・F・

Gの「云」と比べて文字の大きさがやや小さく見えることである。このことは、①をもとに辞書本文を構成していったが、①からだけでは「云」を示すべき行頭の八語が揃わなかったため、b・d・hの三語は新たに「云」を書いて版面に入れたものと見るのが考えやすい。他の部の事例であるが、②の本部では、冒頭の乾坤門の他に、言辞門の後に改めて乾坤門が置かれ、「細道—爐土—法隆寺—本国寺」の四語が掲出されている。この四語は①では乾坤門の末に、行頭から同じ順序で並んでいることから、パッチワーク的に辞書本文を構成する際に誤って落としてしまっていた部分をも末に添加したものと見られる。

④と⑥は、行頭に位置する場合に「云」を示すというような配慮は見られない。④が行頭以外の位置に移動したGにおいて「云」を「―」にする以外は、「云」と「―」の掲出は①と同様になっている。「云」を示しているC・E・F・I・J及び⑥のGは、いずれも行頭ではないことから、④⑥の辞書本文を構成する段階で「云」を示したのではなく、①を承けることでこのような配置になっていることは明らかであろう。

さらに、ア部言語門の「相」を頭字とする語群も見ておく。

① 相あいともなふ 比あいつとむ 逢あひかたる 図あひづ 互あひながひに 申あいかまへて 合あはす 叶あひかなふ 対あいたつがまつる 仕あひかまへて 改行
 相あいしやう 性あいたつね 待あひまつ 拘あいはからふ 統あひつづく 渡あいわたし 計あひすみ 濟あひ

② 相あいともなふ 比あいつとむ 逢あひかたる 図あひづ 互あひながひに 申あいかまへて 合あはす 叶あひかなふ 対あいたつがまつる 仕あひかまへて 改行
 統あひかまへて 構あひつづく 渡あひかまへて 相あひかまへて 尋あひたつね 対あいたつね 性あいたつね 待あひまつ 拘あいはからふ 計あひすみ 濟あひ

④ 相あいともなふ 比あいつとむ 逢あひかたる 図あひづ 互あひながひに 申あいかまへて 合あはす 叶あひかなふ 対あいたつがまつる 仕あひかまへて 改行
 性あいたつね 待あひまつ 拘あいはからふ 統あひつづく 渡あいわたし 計あひすみ 濟あひ

⑥ 相あいともなふ 比あいつとむ 逢あひかたる 図あひづ 互あひながひに 申あいかまへて 合あはす 叶あひかなふ 対あいたつがまつる 仕あひかまへて 改行
 相あいたつね 性あいたつね 待あひまつ 拘あいはからふ 計あひすみ 濟あひ

①②④⑥とも、通常の見出語の大きさを「相伴」を掲出し
 が明らかである。

④⑥が①を承けることが、「相」の事例からは④⑥が①を承けることが、
 「相」の事例からは②⑥が①を承けることがそれぞれ明らかである。双方を併せ見るならば、刊年の順番通り、①から②④⑥が出たものと考えるのが妥当といえよう。

①と②と同じ二語で頭字の表示をするもの、位置は行頭ではなく、その必然性はない。したがって、これは①を承けての配置であることが明らかである。④と⑥は、いずれも改行がない配置となっている。④は全てが「一」であり、これはこれで一貫した配置といえよう。一方、⑥は行の途中でその必要が無いにもかかわらず、①と同様の二語で頭字を表示する。したがって、⑥は①を承けること

頭字「云」の事例からは④⑥が①を承けることが、「相」の事例からは②⑥が①を承けることがそれぞれ明らかである。双方を併せ見るならば、刊年の順番通り、①から②④⑥が出たものと考えるのが妥当といえよう。

高梨(二〇〇六)は、乙類の辞書本文を検討する中で、シ部の「親鸞上人」に元禄六年を起点とする年数を記した注文があることを指摘しているが、この注文は①にも見られる。これが先行の書物からの単純な転載でなく、辞書本文編纂時にはじまる記載であるとするならば、この系統の節用集に①よりさらに早い刊年のものが存在したことになる。したがって、②④⑥の辞書本文が①を直接承けて編纂

されたのかどうかはなお検討の余地があるが、元禄期の
中葉に、文書・書簡用語を増補する①のような節用集が刊
行されるや、一、二年の間にその辞書本文を承けた節用集
が、陸続と刊行されるに至ったことをもう一度ここで確認
しておきたい。

三 寺子節用福寿海とその編纂資料

三―一 寺子節用福寿海の伝本と構成

京都府立総合資料館蔵の寺子節用福寿海は、大本一冊、
八二丁。内題は巻頭に「寺子節用福寿海」とある。柱題は「▲
两点字上(中・下)」とあり、丁付も上(イ部)カ部を所収、
「一」〜「二十五終」・中(ヨ部)からテ部を所収、「一」〜
「三十四」・下(ア部)から刊記まで所収、「一」〜「二十二」
及び裏表紙の見返し)のそれぞれが「一」から始まること
から当初は三冊本で刊行されたものと見られる。また、全
丁にわたって頭書が存する。

本書は、柱題が示す通り、左右に付訓を持つ两点形
式で見出語を掲出する。冒頭はイ・ヲ・エ部の他にハ・
オ・エ部を別に有する四七部立のイロハ分類の語彙集で
「一筆啓上」に始まり「寐」に終わるイ部から、「須磨」に
始まり「寸斗京」に終わるス部まで見出語総数は三三三六
語。その後に「一」「百」「千」「万」を頭字とする語群を掲

出し、「万歳楽而已也」で終わる。その左に「篇冠尽」、最
後に「京寺町通松原上ル町／菊屋七郎兵衛板」と書肆名が
見える。頭書は見出語に関する注文や絵を掲出しており、
巻末には「名つくし」、「天神像」「渡唐天神」「綱敷天神」
の図、草書化の程度を異にした「御」「殿」「恐惶謹言」
の表記例、十千と十二支図があり、最後に「元禄六年／癸酉
正月吉祥日」と刊年を記す。

表紙にはイロハ各部の見出語の目次を示す目録簽が元の
まま貼付されているが、題簽は近代の後補で、「寺子節用福
寿海(元禄六／(一六七三))」と記す。伝本は他にも存す
るものと思われるが、今、総合資料館本と同版と見られる
架蔵の一本を参照できるのみである。後者には破れ等が存
することから、本稿では総合資料館本を主とし、適宜に拙
蔵本を参照しながら検証を進めることとする。

三―二 寺子節用福寿海と両仮名雑字尽

寺子節用福寿海の「寺子」が初学向けの節用集であるこ
とを示すことは、とりたてて述べるまでもあるまい。これ
に類似の書名を持つ辞書として早いものは、酒井(一九八六
a)が言及する両仮名雑字尽の改題本であろう。この本は、
山田忠雄氏蔵本で、両仮名雑字尽の万治二年松会開版本の
後印にあたる。上巻の内題は万治二年本のまま「両仮名雑

字尽上」であるが、下巻は初印に「両仮名雑字尽下」とあつたものを、入れ木によって「童子節用集下」と改刻しているとのことである。元禄二年の書入があることから、寺子節用福寿海よりも早い印行ということになる。松会版自体は江戸での出版であろうから、京都で刊行された本書との直接の関係を認めるには慎重でなくてはならない。しかし、本書の柱題が「両点字」であり、また、実際に両点（＝両仮名）の形式で見出語を掲出していることを思えば、まずは、本書と両仮名雑字尽との関係を確認すべきということになろう。結論を先取りするならば、本書は両仮名雑字尽の増補本としての性格を有していると思われるのである。

両仮名雑字尽は、行草体の一行で漢字見出語を掲出し、イロハ分類に應ずる右訓とそれとは異なる字音・字訓の左訓をいづれも平仮名で示す両点の形式を採っている。語彙集の構成は、冒頭にイロハ四七部立の語彙集を置き、次いで「一」「百」「千」「万」を頭字とする語群を掲出する。そしてこれらの語群は「万歳楽 而已也」で終わる。ただし、各語群の見出語数は次のように異なっており、全体に寺子節用福寿海の語数が多くなっている。

| | | | | | | |
|----|-------|----------|----|----|----|---|
| | | イロハ分類語彙集 | 一 | 百 | 千 | 万 |
| 両仮 | 一一二二語 | 六四語 | 三語 | 三語 | 一語 | |
| 寺子 | 三三三六語 | 九五語 | 四語 | 三語 | 四語 | |

* 寺子節用福寿海の三三三六語には語群最後の「京」を含む。

酒井氏は、両仮名雑字尽のイ部について、「懇勲」に始まり「已上」に終わる見出語を示した上で、「節用集の言語門のごとき語種であるが、排列の基準はかならずしもはつきりしない。しひて傾向をあげれば、熟語群ではじまり一字の和語が比較的部末におほいことであらうか。「已上」が最後にあるのが意図的のやうにもおもへる」と述べる。イロハ分類の語彙集の末尾にあるス部は「推量」に始まるが、「数量」を最後に置いて「一」を頭字とする語群に繋がれていることも、同様の意図の現れといえようか。酒井氏はまた、「張行申度候」「理不尽之儀申掠」のような見出語が存することについて、「いかにも 原資料が書簡文であることをおもはせる」とし、他にも「莫太之儀」「違乱煩」のような「未分解の書簡文慣用句」が多数存するとしている。また、石川謙氏・石川松太郎氏の研究を紹介しつつ、両氏の研究において両仮名雑字尽是、「語彙科往來の一、字尽型（二、名寄型に対する）中の第一、いろは字尽型（第二類別字尽型、第三学習方法観に基づく字尽に対する）に属し、(3)いろは別熟字集（いろは別単字集

に對する)に位置せしめられてゐる。」として、「鎌倉時代中期の『消息詞』にはじまる民間日用の消息用語句集として、広義の往来もの、一類と規定され位置づけ」たことを評価している。本稿もこの見解に従うものである。

一方、寺子節用福寿海のイ部は「一筆啓上」に始まり「寐」に終わる。また、ス部は「須磨」に始まり「寸斗」で結んだ後に「京」を置き、「一」を頭字とする語群が続く。イロハ各部分には意義分類の表示はみられないが、巻頭の「一筆啓上」を除けば、おおむね、節用集であれば乾坤門や時節門に存する語に始まって言語門に存する語で終わるといふ傾向がある。語順にしろ、「須磨」のような固有名詞を取めることにしろ、両仮名雑字尽とは異なる意図が窺われるわけであるが、両仮名雑字尽には見られない「一筆啓上」を巻頭に増補した上で、両仮名雑字尽と同様に「而已也」で結ぶ構成は往來物的な編纂意図を示すものといわねばなるまい。

右に述べたように、両仮名雑字尽と寺子節用福寿海とは多くの共通点を有している。しかし一方で、見出語の数や配列の方針が異なっていることもまた事実である。寺子節用福寿海が両仮名雑字尽とともに編纂資料としたのはどのような書物であつたのだろうか。

三一三 寺子節用福寿海の編纂資料

寺子節用福寿海が両仮名雑字尽を承けて編纂されたものであることは明らかであるが、他に考えられる編纂資料としては、書名にも含まれる「節用」集が第一に考えられる。元禄六年正月の段階では、延宝八(一六八〇)年刊の合類節用集や新刊節用集大全のように多くの編纂資料を駆使して大規模な増補を行っている節用集が既に刊行されている他、貞享二(一六八五)年刊の頭書増補節用集大全のように易林本節用集の所収語を多く受け継ぐ系統、寛文二(一六六二)年刊の真草二行節用集や貞享三年刊の広益二行節用集のように古本節用集の永禄十一年本類や歌語辞典に拠つて増補を行っている系統、元禄四年刊の頭書大広益節用集のように、頭書増補節用集大全と広益二行節用集の二系統を併せて編纂された系統等、多様な節用集諸本が刊行されている。寺子節用福寿海の編纂に節用集が参照されたと見る場合に、いずれの節用集を想定すべきかを確認していくことにしよう。

まずは、比較的明示しやすい事例として、巻末の「一」を頭字とする語群の編纂を確認する。寺子節用福寿海におけるこの語群は「一荷」から「一面」までの九五語。一方、両仮名雑字尽巻末の「一」を頭字とする語群は「一荷」から「一力」まで、六四語である。両者を比較すると、両仮

名雑字尽が掲出する六四語の全てが、寺子節用福寿海が掲出する語群の六六番目までに掲出されていることが確認される。煩雑を厭って語例を示すことはしないが、寺子節用福寿海の一番号から六六番目までの語について、両仮名雑字尽における掲出順を示すと次のようになる（以下、一致の認定に際して仮名遣いや語形の小異は無視する）。一致しない二語の箇所は■で示した。

- 1 2 3 4 5 6 7 8 40 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27
 28 31 29 30 32 33 34 35 36 37 38 39 41 42 43 44 45 46 47 ■ 48 49 50 51 52 53 54 55
 56 57 ■ 58 59 60 61 62 63 64

■で示した二語（「一党」と「一軒」）が見られないことを除けば、語順の一致も顕著であることから、この部分は両仮名雑字尽を承けたものと考えてよからう。節用集が参照されたと考える場合、六七番目以降の次の二九語についての一致を見ることになる。各語の上の算用数字は、寺子節用福寿海の掲載順である。

- 67 旦 68 段 69 冊 70 柄 71 藝 72 斤 73 疋
 74 紙 75 刻 76 切 77 一滴 78 偏 79 片 80 句
 81 笑 82 味 83 文 84 一牧 85 両 86 帖 87 物
 88 様 89 部 90 具 91 一膳 92 丈 93 俵 94 円
 95 面

元禄五年までに刊行された節用集の中で、所収語の特徴が顕著な節用集として、延宝八（一六八〇）年刊の合類節用集^合、同年刊の新刊節用集^大、貞享二年刊の頭書増補節用集^大、貞享三年刊の広益二行節用集^広、元禄四年刊の頭書大広益節用集^大、の五本を選び、上の二九語と一致する語が各々の節用集でどのような順序で掲出されているかを示したのが次の表である。各本が収めていない語の項には■を示している。また、寺子節用福寿海の「一紙」の項には■を対して、節用集諸本に「一紙半銭」「一文不通」とあるもの、「一牧」に対して「一枚」とあるものも一致例と見なした。

| 大 | 広 | 頭 | 新 | 合 | |
|----|----|----|----|----|----|
| 1 | 1 | 1 | 21 | 17 | 67 |
| 2 | 4 | 4 | 8 | 4 | 68 |
| 3 | 6 | 6 | 5 | 5 | 69 |
| 4 | 5 | 5 | 9 | 10 | 70 |
| 5 | ■ | ■ | ■ | ■ | 71 |
| 6 | 3 | 3 | 2 | 3 | 72 |
| 7 | 2 | 2 | 6 | 8 | 73 |
| 8 | ■ | ■ | ■ | ■ | 74 |
| 9 | ■ | ■ | ■ | 1 | 75 |
| 10 | 7 | 7 | 20 | 15 | 76 |
| 11 | 8 | 8 | 13 | 11 | 77 |
| 12 | 9 | 9 | 23 | 12 | 78 |
| 13 | 10 | 10 | 22 | ■ | 79 |
| 14 | 11 | 11 | 14 | ■ | 80 |
| 15 | 12 | 14 | 24 | ■ | 81 |
| 16 | ■ | ■ | 26 | ■ | 82 |
| 17 | 13 | 12 | 15 | 18 | 83 |
| 18 | 15 | 13 | 10 | 7 | 84 |
| 19 | 14 | 15 | 1 | 2 | 85 |
| 20 | 16 | 16 | 3 | 6 | 86 |
| 21 | 17 | 17 | 18 | ■ | 87 |
| 22 | 18 | 18 | 19 | 16 | 88 |
| 23 | 19 | 20 | 4 | 9 | 89 |
| 24 | 20 | 21 | 25 | 13 | 90 |
| 25 | 24 | ■ | 11 | ■ | 91 |
| 29 | 25 | ■ | 7 | ■ | 92 |
| 26 | 23 | ■ | 12 | ■ | 93 |
| 27 | 21 | 22 | 16 | ■ | 94 |
| 28 | 22 | 19 | 17 | 14 | 95 |

一見してわかるのは、頭書大広益節用集が二九語全てを収め、かつ語順も極めて高い一致を示すことである。頭書大広益節用集は、頭書増補節用集^大の所収語を基本とし、主に広益二行節用集を参照して冒頭に近い部を中心に増補を加えた節用集である。したがって、広益二行節用集や頭

書増補節用集大全との間に見られる部分的な語順の一致は、頭書大広益節用集がこの両書を編纂資料としていることによる間接的なものと考えるべきであろう。

なお、頭書大広益節用集は、両仮名雑字尽との一致が顕著な前半の六六語のうち、両仮名雑字尽が収めていなかった「一党」と「一軒」を含む六〇語を掲出している。しかし、こちらの語群は掲載順がほとんど一致しない。したがって、寺子節用福寿海の「一」を頭字とする語群は、両仮名雑字尽に所収の語を引用した後に、それ以外の語を頭書大広益節用集から選んで増補を行ったものと推察されよう。

イロハ分類体の語彙集においても右の二書が編纂資料として想定される。頭書大広益節用集の増補が冒頭部分において顕著であることから、冒頭のイ部及び関連するキ部の見出語の一致状況を例に説明しよう。寺子節用福寿海のイ部・キ部の見出語は次の通りである。通し番号を付しているが、数字の表示で次の区別をしている。

通常の表示 〓 頭書大広益節用集のみと一致する語 (七九語)

太字 〓 両仮名雑字尽と頭書大広益節用集ともに一致する語 (三三語)

枠囲み 〓 両仮名雑字尽のみと一致する語 (五語)

白抜き 〓 いずれとも一致しない語 (九語)

なお、頭書大広益節用集にはその名の通り頭書が存するが、頭書部分との一致もここに含めている。また、キ部が

イ部に統合されている頭書大広益節用集に対して、両仮名雑字尽はイ部とキ部とが別に立てられており、「6陰陽」「18医師」「62首信」「76調」は、両仮名雑字尽ではキ部に収められている。

イ部

- 1 一筆啓上 2 懃懃 3 稻荷 4 岩倉 5 板橋 6 陰陽 7 一氣
- 8 田舎 9 窟 10 石山寺 11 新熊野 12 至 13 伊弉諾伊弉册 尊
- 14 齋院 15 古今 16 昔 17 家主 18 医師 19 衣裳 20 一服
- 21 類 22 衣桁 23 一冠 24 以来 25 後 26 遺恨 27 異儀 28 異見
- 29 意趣 30 員数 31 移住 32 居所 33 已前 34 已上 35 聊 36 威勢
- 37 因果 38 暇乞 39 最愛 40 一安 41 因縁 42 勇 43 弥 44 弥増
- 45 一書 46 未審 47 未 48 往古 49 経営 50 闘諍 51 奈何 52 何為
- 53 闇ヶ敷 54 憤鬧 55 誘 56 器量 57 寵愛 58 光彩 59 好色
- 60 勞敷 61 況 62 音信 63 一物 64 忌々敷 65 羊躑躅 66 一朱
- 67 一疋 68 衡鑄 69 折 70 袴 71 壯気 72 諱 73 隠居 74 隠遁
- 75 連乱 76 調 77 優長 78 争 79 若固 80 急 81 引導 82 生
- 83 去 84 懷 85 戴 86 祝 87 徒 88 命 89 軍 90 偽 91 賤
- 92 痛 93 雖 94 致 95 出 96 入 97 禁 98 唾 99 憤 100 不忍
- 101 厭 102 否 103 座 104 清 105 色葉 106 姪乱 107 幾久敷 108 忒越
- 109 嘖 110 如何様 111 活 112 寐

牛部

- 113 音信 114 印判 115 印可 116 逸物 117 院宣 118 座 119 居所 120 違背
 121 違乱 122 隠者 123 謂 124 困饒 125 位牌

のべ一二五語のうち、九割以上の語が両仮名雑字尽と頭書大広益節用集で網羅されることになるが、他の節用集が参照された可能性の有無も検討しておく必要がある。そこで、両書に見られない九語について、先に見た節用集諸本に見られるか否かを確認すると、新刊節用集大全に「岩倉」が、頭書増補節用集大全に「出」が見られる。しかし、前者は姓氏門の見出語であり、寺子節用福寿海が乾坤門相当の位置に掲出すると同列に扱うわけにはいかない。一方、後者は、一例とはいえ、当時広く流布していた系統の節用集との一致例であることから、両書が参照された可能性について、少し丁寧に確認しておく必要がある。

イ部と牛部で、頭書大広益節用集のみに一致するのべ七九語のうち、頭書増補節用集大全に見られない語が、「石山寺」「新熊野」「齋院」「家主」「弥書」「奈何」「誘」「光彩」「音信」「莊気」「優長」「若固」「賤」「唾」「座」「清」「色葉」「姪乱」「老越」「位牌」と二〇語ある。一方、頭書増補節用集大全に見られて頭書大広益節用集に見られない語に「威勢」「未」「生」「出」「逸物」の五語があるが、

このうちの四語は枠囲みの数字で示した通り、両仮名雑字尽に見られている。そして次に示すように、左訓を確認すると両仮名雑字尽からの引用と考えるのが自然であるものがほとんどである。左訓は（ ）内に示している。

| 寺子節用福寿海 | 両仮名雑字尽 | 頭書増補節用集大全 |
|-----------|-----------|-----------|
| 威勢(いきをひ) | 威勢(いきをひ) | 一勢(いきほひ) |
| 未(ひづし) | 未(ひづし) | 未(み) |
| 生(むまる、) | 生(むまる、) | 生(せい) |
| 逸物(はやきもの) | 逸物(はやきもの) | 逸物(はやきもの) |

また、寺子節用福寿海の牛部の見出語はごく少なく、両仮名雑字尽の牛部に見られないのは五語のみである。そのうちの「居所」を除く四語は、いずれも頭書大広益節用集のイ部に語頭の仮名を「ゐ」で表記する付訓で掲出されている。頭書増補節用集大全のように牛部を有する節用集が関与していた可能性は低いと考えざるをえない。したがって、「出」の一例は存するものの、頭書増補節用集大全を参照したとする積極的な証拠は見出し難いことになる。

「一筆啓上」以下の九語の存在から、寺子節用福寿海の編纂には、両仮名雑字尽と頭書大広益節用集以外の書物も参照されたと思われるが、その書物を明らかにするためには、節用集以外の書物をも視野に入れた調査が必要となるであ

ろう。

三―四 寺子節用集福寿海における増補と改変

寺子節用福寿海の主たる編纂資料が両仮名雑字尽と頭書大広益節用集であると仮定した上で、寺子節用福寿海が、両書から受け継いだ面と改変した面について改めて確認していくことにしよう。

版面上、頭書を配することは頭書大広益節用集と共通しており、頭書の内容には頭書大広益節用集から転載した絵や注文が確認される。しかし、辞書本文に限定すれば、オ・エ部を残すイロハ四七分類であること、見出語をごく大ぶりの行草体一体のみで掲出すること、各部内に意義分類を施していないこと、名数語彙の多くを巻末に一括して掲載することなど、形式的には、両仮名雑字尽を受け継ぐ面が多いものといえよう。

見出語の性格を見ると、両仮名雑字尽が主に収めていた節用集の言語門に存するような語だけではなく、節用集の掲出順にほぼ沿って、衣服や器財関係の語、それほど多くはないが地名や人名をも収録しており、掲載の語数だけではなく、意味分野の面でも拡充を図っている。そしてその大部分が頭書大広益節用集からの引用と見られることから、見出語の総体としては、節用集を抄出した語群に、両仮名

雑字尽に由来する語群が若干混ざるという結果となっている。

限られた紙幅に大字で見出語を掲出することから、抄出がなされることは当然であろう。高梨(二〇〇六)によると頭書大広益節用集の項目数は一万一千弱であることから、寺子節用福寿海の見出語数は、その三分の一以下である。初学者のために必要な語が採られ、そうでない語は省かれたということになるが、その抄出と改変の一端について、具体例とともに検討してみよう。

元来の見出語数が少ない両仮名雑字尽にあっても、寺子節用福寿海に受け継がれなかった語は見られる。先に検討したイ部・オ部と、後半部分からア部を選んでその具体例を示す。

【寺子節用福寿海に収められている語】

- イ 懇慫遺恨いんきんいこん 以来移住いらいいぢゆう 威勢意趣いせいいしゆ 戴員数たいいんじゆ 聊未因果りやくまいいんぐわ 至いたる
 - イ 引導いんどう 勇異因縁ゆういゐいんゑん 生入去せいじやく 已前いぜん 懷祝わいじゆ 徒弥たぢ 已上いじやう
 - オ 音信おんしん 印判いんぱん 逸物いつぶつ 院宣いんせん 座ざ 医師いし 謂印いひいん 可か 陰陽いんやう 罔饒わんじやう
 - ア 哀憐あいれん 安穩あんゑん 愛敬あいけい 行脚ぎやうきゃく 浅増せんぞう 剩まじ 或危わくゑい 愛擲あいぢやく 上欺じやうき
- 鮮価せんか
- 【寺子節用福寿海に収められていない語】
- イ 盛勞暇せいろうあ
 - オ 違背之族ゐはいしゆく 違乱煩ゐらんわんらん

ア 悪口あつこう 可惜あつかり 有増之事あたましのこと 荒方あらかた 闇夜あんや 詠置候あつげをき 暴取あらし 以跡々寄あとあとより
直ちか 餘多あまた 相渡申候あひわたす 預ヶ置候あづけをき

採られなかつた語にはいくつかの理由が推測される。例

えば、「盛」いさ「直」ちかの場合、同訓の「入」い「価」あひが採られている。また、「暇」いとま「違背之族」ちがひのむら「違乱煩」ちがひわづらひ「可惜」あつかり「詠置候」あつげをき「跡々寄」あとあとより「餘多」あまたは採られなかつたが、代わりに頭書大広益節用集から「暇乞」いとまごひ「違背」ちがひ「違乱」ちがひらん「可惜」あつかり「詠」あつ「跡」あと「数多」あまたが採られている。「敢以」あへても採られなかつたが、頭書大広益節用集の「敢」あへをも勘案したゆえか、「敢而」あへての私たちで見えている。このように、両仮名雑字尽の見出語と同訓の語や、見出語を含む語、乃至は見出語の一部に相当する語を掲載することによって、両仮名雑字尽に掲載のまま収めるには至らなかつた語が出てきたことになる。こうした処置をしたためか、「相渡乱煩」あひわたらん「相渡申候」あひわたす等、酒井氏が両仮名雑字尽の見出語の特徴としてあげた「いかにも原資料が書簡文であることをおもはせる」「未分解の書簡文慣用句」は、寺子節用福寿海ではそれほど目立たなくなっている。ア部には、「敢而」あへて以外にも、両仮名雑字尽に見えない「預り」あづかり（頭書大広益節用集では「預」あづかる）のような掲出例もあることから、往來物に連なる面は残しているわけであるが、全体としては、節用集の見出語として不自然でな

いように改変を行ったものと考えることができる。

四 まとめ

寺子節用福寿海の辞書本文は、両仮名雑字尽に由来する字尽の語と形式を保持しつつ、頭書大広益節用集の所収語を取り込んだものであった。合類節用集の所収語に抛りつつ、「尊札」そんさつ「玉床下」ぎよくしょうかのような書簡用語を増補した同年刊の広益字尽重宝記綱目とともに、旧來の節用集が収める語と書簡・文書用語とを併せて掲出する辞書としては早い例ということになる。書名に「節用」を含むか「字尽」を含むかという相違が存する一方で、広益字尽重宝記綱目は意義分類の下にイロハ分類を置く合類形式の節用集であることから、寺子節用福寿海、広益字尽重宝記綱目とも、イロハ分類の下に意義分類を置いていないという点に共通点があることは注意しておくべきであろう。

イロハ意義分類体の節用集で新たに書簡・文書用語の顕著な増補が見られるものの刊行は、確認できる限り元禄八年からであった。そしてそこには、「互申合」あひがは「対仕」あひあつ（19頁参照）のように、両仮名雑字尽から寺子節用福寿海に転載される段階で句の長さから語の長さに解体されることので多かつた「未分解の書簡文慣用句」といえる語も見えるの

である。字尽と節用集との辞書本文上の接近は、元禄期に双方からなされ、交錯していたと見る事ができる。頭書増補節用集大全の諸版が節用集の主流であった元禄五年に刊行の広益書籍目録大全で節用集諸本は、「童訓集」や「両点字尽」が掲出される「往来手本類」ではなく、「字書」の項に分類されていた。¹⁶しかし、先に言及した①〜⑧のような節用集諸本が主流となっていた享保十四年の新書籍目録では、書言字考節用集が「字書」の項目に残るものの、他の節用集は「往来手本類」の項に分類されている。このことの意味付けは、付録部分の増補との兼ね合いもあって、慎重を要するところではあるが、学芸に連なる人々が参照することの多かった近世初期までの節用集の辞書本文から、より多くの人々の日常に必要とされた書簡・文書用語をも増補するようになっていった近世中期の節用集の辞書本文への展開の一面を反映していることは間違いないであろう。¹⁷

字尺諸本や往来物に含まれる語彙集の編纂過程については個々に明らかにしなければならないことが多い。従来の節用集に、初学に対応する字尽の所収語を加えることで元禄期の節用集の辞書本文が成立した、というほど単純なものではなからうが、今回検討した事例において、「寺子」向けの「節用」と銘打ってなされた字尽の増補が、結果として元禄中葉以降の節用集の流れを先導しているように見え

ることは極めて興味深いことといえよう。

注

- (1) 広益字尽重宝記綱目については、内田(二〇〇九)を参照した。また、先稿の前後、高梨(一九九七b)はXとZ類に関する系統的な見通しを述べ、高梨(二〇〇六)では、この類に属する節用集の形式と内容についてより詳細な検討を行っている。一部の語順の面からこの時期の節用集の検討を行っている菊田(二〇〇五)(二〇〇七b)もある。また、佐藤(二〇〇九)(二〇一〇)により、XとZ類に属すると見られる節用集が①〜⑧以外にも存することが明らかになっている。本来は、これらの成果を踏まえて諸本とその辞書本文の対照結果を示すべきであろうが、本稿の目的からはずれる部分が大いことと、紹介されている諸本についての悉皆調査が済んでいないことから、本稿ではひとまず先稿で言及した諸本の事例を示すに止める。
- (2) この本は、佐藤(二〇一〇)の「別表」近世節用集一覧」が元禄八(一六九五)年の項に「書名なき一本」として掲載するものに該当すると見られる。
- (3) 神戸女子大学蔵本も辞書本文は完備するが、首尾を欠く。なお、原本について拙蔵本と比較する機会を得ず、マイクロフィルムの画像による比較であるため、同版であるか否かの判断は今保留する。
- (4) 版本の節用集諸本の系統関係にこうした観点からの分析を行っ

た先例として柏原（一九七三）（一九七七）、佐藤（二〇〇八）、高梨（一九九七 a）等がある。

(5) 総合資料館本は拙蔵本よりもやや後印と見られ、拙蔵本では白紙となつている中の三四丁裏に九九と篇冠尽が（おそらく久れ木で）掲載されている。

(6) 両仮名雑字尽は石川県立歴史博物館蔵の水田版によるが、破損部分は酒井（一九八六 a）の翻字を参照した。

(7) 両仮名雑字尽の語数は、酒井（一九八六 a）の示す項目数に拠つている。

(8) これに関連して、山田（一九六七）では、快言抄で書簡文中に収めているイロハ分類の語彙集や意義分類体の語彙集が、北野本佚名辞書や運歩色葉集のような形態に発展して行つたとの見通しが示されている。また、高橋（二〇〇六）は、高橋氏が「色葉字」と総称する中世のイロハ分類体辞書のうちに、同時代の節用集とは異なり、「実務的な文書用語を意識的に載録しようとする姿勢が明らかに看取される」ものが存することを指摘する。

(9) 江戸初期に刊行されたイロハ分類体の字尽としては他に、江戸初期刊の両仮名手本、万治二年刊の童訓集等がある。前者については酒井（一九八六 a）が、山田忠雄氏蔵本によって具体例を示しつつ、両仮名雑字尽と「形式面のみならず内容的にもか、はりあるもの、ごとくである」と述べ、小泉（二〇〇一）は、両仮名手本のようなものから両仮名雑字尽が出たものと推測していることから、注目すべき一本と思われるが未見である。佐藤（二〇一一）が言及するように、「两点」という面に限っても節用集と字尽や往来物との関係は精査の必要がある。また、童

訓集については、木村（一九八〇）の解題が、同書のイロハ分類体の語彙集中の「天地人倫言語」一部の語について、その多くが古本節用集に見出されることと、残りの語も「消息用語集的な往来物には多く見出し得るものである」ことを述べている。こうした見出語の傾向に加え、書名に「童」字を含むこと等、寺子節用福寿海と共通する面が存することになるが、今のところ、直接の依拠関係を見出すには至っていない。ただし、このような先例があることは重視しておくべきであろう。

(10) このような系統関係については、菊田（二〇〇七 a）、高梨（一九九二）（一九九七 b）（二〇〇六）、米谷（一九九七）に拠る。なお、合類節用集が寛文二年刊の真草二行節用集の系統を、広益二行節用集が合類節用集や新刊節用集大全を承けていることなど、相互の交渉は複雑であるが、それらについても右の各論考を参照されたい。

(11) 合類節用集と新刊節用集大全は古辞書大系所収の影印本に、他の三本は、亀田文庫蔵本のマイクロフィルムに拠っている。

(12) 「10石山寺」11新熊野」が頭書にある語である。両語については、付随する絵も同様のものが寺子節用福寿海の頭書に転載されている。

(13) 頭書大広益節用集の乾坤門には「巖倉」が見えるので、これを改変したものと考えるのが穏当であると考えられる。

(14) 近世前半期の字尽諸本を精査していないので、元禄期前半頃の意識として、頭書を有することが節用集集であるというようない一般化までできない。往来物には既に頭書を有するものが多数刊行されていることも考慮に入れる必要がある。また、寺

子節用福寿海の頭書部分の全てが頭書大広益節用集によって網羅できるわけではない。一致が確認できない図の中には庭訓往來の注釈書などに見られるものが存する。

(15) 佐藤(二〇一一)は延宝年間までの近世節用集の諸特徴についてその典型の形成を論じている。佐藤氏の言及する特徴の中で、界線が無いことなども寺子節用福寿海が節用集的でないとする一観点となろう。

(16) ただし、「字書」の項にも「万用字尽」という書物が掲出されている。この本については現在未詳である。

(17) 山田(二九七八)の176p以降、及び米谷(二二〇〇三)を参照。

①の節用集で辞書本文の冒頭に内題がないことについて、見返しか扉に内題があったと仮定するならば、辞書本文だけではなく、頭書や付録を含んだ全体が「節用集」であるということが表明された事例ということになろうか。また、柏原(二〇一〇)が、元禄期以降の節用集の付録に大雑書が取り込まれていく過程を跡づけていることも注目される。

参考文献

- 内田宗一(二二〇〇九)『広益字尽重宝記綱目』における複数書体掲出例について(『国語文字史の研究 十二』和泉書院)
- 柏原司郎(一九七三)「近世初期『節用集(横本)』の改版例(上)」(『野州国文学』一二)
- 柏原司郎(一九七七)「縮刷本節用集の性格について」(『浅野信博士古稀記念国語学論叢』桜楓社)
- 柏原司郎(二〇一〇)「近世節用集の付録呪いについて」(『東海大学日本語・日本文学研究と注釈』一)
- 菊田紀郎(二〇〇五)「開版節用集「い」部乾坤門の語順―「乾陰陽デハジマルモノ」を対象に―」(『日本語辞書研究 三・上』港の人)
- 菊田紀郎(二〇〇七a)「寛文五年刊『真章二行節用集』乾坤門の増補語彙」(『中世・近世辞書論考』港の人)
- 菊田紀郎(二〇〇七b)「開版節用集「い」部乾坤門の語順(続)―「乾陰陽デハジマルモノ」を対象に―」(『中世・近世辞書論考』港の人)
- 木村晟編輯(一九八〇)『童訓集』(駒沢大学 国語研究 資料第五)汲古書院)
- 小泉吉永(二〇〇一)『往来物解題辞典 解題編』(『両仮名手本』「両点字尽」の項、大空社)
- 酒井憲二(一九八六a)「『両仮名雑字尽』の版種」(『国語史学の為』に 第二部 古辞書』笠間書院)
- 酒井憲二(一九八六b)「静嘉堂文庫蔵『童訓集』の本文性」(『国語史学の為』に 第二部 古辞書』笠間書院)
- 佐藤貴裕(一九九六a)「近世節用集書名変遷考―資料篇 付言―」(『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』四四・一二)
- 佐藤貴裕(一九九六b)「近世節用集の記述研究への視点―形式的特徴をめぐって―」(『国語語彙史の研究 十五』和泉書院)
- 佐藤貴裕(二〇〇二)「子どもと節用集」(『国語語彙史の研究 二十一』和泉書院)
- 佐藤貴裕(二〇〇八)「『節用集』寛永六年刊本類の本文系統」(『近

代語研究」一四、武蔵野書院)

佐藤貴裕 (二〇〇九) 「近世節用集刊行年表稿」(『書物・出版と社会
変容』六)

佐藤貴裕 (二〇一〇) 「言語生活史からみた近世語—節用集研究の現
況と課題」(『日本語学会二〇一〇年度春季大会予稿集』)

佐藤貴裕 (二〇一一) 「近世節用集の典型形成期」(『国語語彙史の研
究』三十) 和泉書院)

関場武 (一九九三) 「子供節用・寺子節用集」(『慶應義塾大学日吉紀
要』人文科学) 八、本稿では関場 (一九九四) に再録のも
のに拠った)

関場武 (一九九四) 『近世辭書論攷早引・往來・會玉篇』(慶應義塾
大学言語文化研究所)

高梨信博 (一九九二) 「近世前期の節用集—四十七部非増補系諸本の
系統関係—」(『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』
明治書院)

高梨信博 (一九九七a) 『真草二行節用集』諸版の本文と性格」(『早
稲田大学大学院文学研究科紀要』四二—三)

高梨信博 (一九九七b) 「近世節用集の一展開—四十七部系から四十五
部・四十四部系へ—」(『国文学研究』一二三)

高梨信博 (二〇〇五) 「近世節用集の『両点』について」(『早稲田日
本語研究』一四)

高梨信博 (二〇〇六) 「四十四部系近世節用集の成立—『頭書増補大
成節用集』^(高梨)を中心に—」(『国文学研究』一五〇)

高橋久子 (二〇〇六) 「色葉字の性格に就いて」(『訓点語と訓点資料』

一一六)

安田章 (一九八三) 『中世辭書論考』(清文堂)

山田忠雄 (一九六七) 「編輯者注」(『本邦辭書史論叢』福島邦道「日
本一鑑所引の古辭書」対するもの。八二八頁〜八三四頁、
三省堂)

山田俊雄 (一九七八) 『日本語と辞書』(中公新書)

米谷隆史 (一九九七) 「元禄期の節用集について」(『語文』六九)

米谷隆史 (二〇〇三) 「近世中期節用集の意義分類をめぐって」(『国
語語彙史の研究』二十二) 和泉書院)

米谷隆史 (二〇〇五) 「両点本節用集の成立をめぐって」(『熊本県立
大学 国文研究』五〇)

* 本稿は科学研究費補助金「近世節用集の規範意識に関する基礎
的研究」課題番号(二〇五二〇四二〇)の成果の一部である。